

煤掃に装束過ぎて笑はれる
 煤掃の孔明は子を抱いて居る
 煤掃に拍子の揃ふ蒲鉾屋
 煤掃に一人か二人馬鹿な形り
 煤掃に玄關で肴直が出来る
 煤掃にあるき袖口外トにかけ
 煤掃の御せちが祝ひ納めなり
 煤掃の日迄は顔をよごして
 煤掃に巴も途に生捕られ
 煤掃や思へば此金うらめしい
 煤拂けふのかたびら胸合はず
 手の甲へ餅を受取る煤拂
 弾きながら三味線運ぶ煤拂
 取次に出る顔のない煤拂

多をなくしたでおつかない煤掃
 搗くやつをつかぬで煤がはかざらず
 ふんごんで煤をとるのが且那なり
 飛びこんで来やうが煤の仕舞也
 しやか十が出たで煤掃きげびるなり
 あいわたしもと黒ん坊餅を喰ひ
 黒い淡たらし古椀買ひを呼び
 戸板で圍ひほうり出し
 恐ろしい空だと箆筒仕舞ふなり
 身軽に出たちごみがいたしませう
 ごみのすることゝを雇ける忙しさ
 女竹から雄竹へうつる忙しさ
 忙しさ十七寝るとお正月
 黒ク白クに二度よごれると春になり

笹ばたき目出度するは十二月
獨り者ひとなぐりだと笹を買ひ

○十七日十八日晝淺草市正月のかざり江府第一の[○]大市、淺草橋より市物みちく御藏前、駒形、並木にうつり、雷神門の大道東西五丁がほご、三側四側に並ひ境内寸地なし、うらては砂利塙、山の宿にみてり、武士がた町、百姓、此市に立て正月物を求めるを嘉例とす。

『塵塚談』に曰、淺草觀音の市、十二月十七十八兩日也、諸人正月のかざり物を、吉凶を祝ひ此市にて求める事なり、外に江戸に市なし、故に並木町より雷神門内までは、老人小兒の通行思ひもよらぬ事にて、俳句に市の人人より出て、人に入るといふ句もありしに、近ごろに至り、神田明神、深川八幡、芝愛宕、麴町天神に市はじまり、人も相應に出て賑やかなり、麴町はわけて群集なすよし、其故にや近歲觀音の市先年より淋しきやうに見ゆる云々。

右に因て見れば、昔は年の市と云へば、淺草に限つたやうであるが「外に江戸に市なし」とは市らしき市のなき意なるべしと思はる、既に右『續江戸砂子』にも、江府第一の大市とあるを見ても明かである、何れにせよ淺草の年の市は最も雑沓を極め、最も

有名であつたから、古川柳にある年の市の句は、總て淺草の年の市を咏んだものと稱して可なる程である。「江戸歳事記」にも其盛況を記して、今日寶前には修法なし、堂前にて大黒天開運の守を出す、當寺境内は云ふに及ばず、南は駒形堂より御藏前通り淺草御門迄、西は門跡前より下谷車坂町上野黒門前に至る迄、寸地を漏さず假屋を補理し、新年の儲けとて、注連飾りの具、庖厨の雜器、破魔弓、手鞠羽子板等の手遊び其餘種々の器具をならべ、售ふ聲は巷にかまびすしく、都鄙の詣人は是を恒例とし陰晴を嫌はず群集すると更に晝夜のわかちなく大路に駢闐して、東西に道を分け兼ね、縦横に目も配りがたし、又裏手の方は山の宿砂利塙に満ちて夥し、此日吉原の賑ひいふも更なり云々とある。

江戸中の市金龍が板がしら
此市に大黒天を盗み取り、持ち歸つて祭れば翌年は幸運であるとの迷信から、商人の目を暗ますものが多くあつたさうである。

大黒は盗んで罰にならぬもの
大黒を盗み一目散に逃げ

大黒を手長島から買ひに来る
 大黒はそれからごろんじやりませう
 大黒の外を目掛けるわるいやつ
 大黒はいゝがあぶりこ手がわるし
 大黒を盗んで手桶置て来る
 大黒屋市兵衛油断せぬ男
 大黒の御宮は錢の出たのなり
 幕の市毎年盗む律義者
 正直なごろぼ大黒斗カ盗み
 御人躰にもと大黒取り戻し
 盗難に大あなむちの命あひ
 盗人に祝へくと市戻り
 かます小楯に彼の大黒をねらひ
 市に俵をふんまへたもの目がけ

俵のついでに鯛までも盗まれる
 恵比須様人たがへにて盗まれる
 貧の盗みは大黒に目はかけず
 盗人に飛入のある市二日
 盗人に捨てられて居る恵比須様
 盗みついでにお宮もと心がけ
 市のあさやもめ恵比壽か三ッ出来
 市の不首尾は恵比須屋にて買て来る
 氣の弱い奴が大黒買て来る
 市歸りおんまかぎやらをそつと出し
 見つかつて此大黒はいくらだの
 事を好むやうなもの大黒賣
 米二俵たもとへ入れる運のよさ
 年の市弓は手桶に納めたり

供部屋を手桶でふざぐ市の客
 市戻り手桶をぬいで嘔する
 市戻り手桶をぬいで酔儀をする
 手桶をも買つて來なよと愚か也
 吠える犬手桶をかぶり追廻し
 仁和寺は鼎手桶は淺草寺
 手桶の新らしきはかんむりになり
 てつきうでかゝれば桶でうけ
 おや市さんだと手桶を禿いひ
 百兩と手桶あづかる若い者
 馬鹿な形り手桶をがぶり引づられ
 あぶりこを買へと手桶が物をいふ
 摺小木と手桶見倒しと四郎兵衛いひ
 摺小木にすがつて禿引いて來る

摺小木にもろ手をかけて禿引
 摺小木を市から市へ喰ひへらし
 摺小木でなぶつて通る楊枝店
 市の生酔摺小木にそりをうち
 弓削の道鏡參内と市歸り
 はぐれるなよまいぞと摺小木にとかまらせ
 今年の市は摺小木に羽根が生え
 此頃に来るよ摺小木まあよこしや
 紅葉のうらに摺小木をさげて來る
 ぢざはらの頭巾山椒を一本きめ
 味噌をする爲めに摺小木聲は買ひ
 市の客とめるとこれを押込むぞ
 親の目を股引で抜く年の市
 三分一入唐をする暮の市

年中行事

生息子と見えて朝から市へ立ち
買物が違ふと遅く市へ立ち
ほとばりがさめぬで市の足をとめ
あてはめた市を息子はとめられる
かこつけのしまひが市と息子行き
買物は裏白根松女郎なり
市でない事は息子の形りで知れ
市戻りはいりかねたる十九日
市に寄りいよく罪が重くなり
浅草の市の裏目の御大名

〔解〕六郷家、賽の目の一の裏は六、

市に寄り虚言ンしたゝか聞て来る
市以來息子賣切り申候
かつがれはせぬと娘のねだる市

市の供信濃ひたすら願ふ也
市過の嫁喰つみで引合せ
市過はせねの入ることゝろつびやう
市過の客はれものにさはるやう
新造のなぐれた市と素見いひ
新造が今年の市はきついきれ
料理人うなづきながら市へ立ち
吉原も市の仕込に多を書き
正身の化けものになる市二日
市二日突出しの出る楊枝店
観音さつたの買物二日なり
観音は千手の見世を二日出し
北國の方に人氣が二日立ち
新玉に使ふは暮れの御縁日

野陣を張つて正月の物を賣り
 もんくの半纏飾り物を賣り
 正月の買物に出て氣がそれる
 春の買物だと隣りからなだめ
 市歸り大戸上げろと脊負て居る
 獲物々々をひっさげて市歸り
 市土産寐たり起きたり笑はせる
 市歸り二百餘つて氣にかゝり
 弊あつて形なし市の馬く
 馬で市人もなげなるしかたなり
 神馬引市をつつきつんまはし
 年寄をわらぶとにして市歸り
 はぐれたら板の下と市兵衛いひ
 掛り人たとへの如く市へ立ち

淺草の土間を借りるといそがしい
 明き店に置くのは市のなぐれもの
 女房へ恩は其日の市戻り
 亭主をばいひこめ内儀市へ立ち
 變生男子でお内儀市へ立ち
 股引を引ッからげて女房市に懲り

○廿日 前後より餅搗。 ○としわすれ。

『東都遊覽年中行事』には、二十六七日頃迄にもつはら餅つきあり、賃錢にて餅屋に搗かせるを賃餅といひ、釜を持あるきて搗くを引すり餅といふ、是等は町家にて便利にしたがふ事なり、引すり餅は通夜の業なれば、深夜の街上寒月の下に餅搗の音をきくは昌平鼓腹の光景なり、とある。昔は塩魚乾魚に餅を添へて親戚に贈り、歳暮を祝つたのである、之れを配り餅と稱へた。

餅を搗くこれから嘘をつく斗り
 獨り者飲まぬ代りに二朱が搗き

夜ツびとい地主の餅で寐つかれず
 せわしなき寐耳へ餅の音を聞き
 こねとりは先きをぬらしてさあといふ
 こねとりは尻のかゆいをもて餘し
 是切りのこねとりぐつとさし上る
 一ト長屋いつちになつて餅を搗き
 寝所の相談をして餅を搗き
 すまぬ事隣ではもう餅を搗き
 こはい事炬燵で餅を搗く氣なり
 素人が餅屋になると忙しい
 大釜の月代を刺る忙しさ
 大釜のつるんだ時の忙しさ
 無い奴の癖にそなへをでつかくし
 二十日過廻りに釜を借りられる

寒い事團扇づかひを餅屋する
 月迫に餅屋は團扇づかひなり
 女房うるさく餅米は
 金借りに白水またぎ行き
 のし餅もよく見れば裏表
 のし餅を着物のおしにいゝ仕廻ひ
 大判を一分にくづす餅麩
 正月の餅は内儀の名付親
 お里へと書いてすわりへくはへさせ
 おそなへの取ッ替へこする忙しさ
 御膳籠から餅の出る月迫さ
 大家から葢ももちやげぬ餅を呉れ
 遣れば取るものだと餅の相談し
 さつくと配れと渡す鏡餅

一軒の口上で済む配り餅

又今のやうにさといふ配り餅

配り餅から女人とてへだてなし

配り餅草鞋をはくと一里の餘

尙年忘れ就ては、同書に、今月の末にいたり日限は自意にまかせ、親戚又は朋友を集め酒宴をまうけ、絃曲歌舞して遊樂するを俗に年忘れといふ、此事近俗の風にはあらず唐土にも古くよりありし事と見えて、潑散とも別歳ともいふは年忘の事なり、東坡が別歳の詩に「且爲一日歡慰此窮年悲」とあり、窮年の悲を慰とあれば、一年の憂き事ありしを忘れ新年を迎ふる心にて、年わすれといふは理りあるに似たり、とある。

年忘れ忘れすこよい顔斗り

年忘れ袴で来たで叱られる

年忘れしたとはけちな女郎買

年忘れきりで替間はひまになり

年忘れ買はれぬ時分一が切れ

年忘れとうく一人水を浴び

年忘れよるけて杭の穴へ落ち

年忘れかせぐ息子の邪魔になり

年忘れ馬鹿につけたる馬鹿の面

年忘れ年忌と讀んで叱られる

年忘れしなのを呼に太郎冠者

年忘れ麻上下で禮を云ひ

來年の樽に手のつく年忘れ

もう民を撫でふと洒落る年忘れ

入智の叱られ始め年忘れ

數へ日になつてこそねむ年忘れ

昔しとつたる梓づかで年忘れ

明日までは利口のいらぬ年忘れ

年中行事

翌日は店を追はれる年忘れ
月迫に寄つて一夜さ飲みあかし

○節分 下谷牛天神おはらの祭り ○厄はらひ来る。

『俳諧歳時記』に、節分豆打、なよしの願さす、終さす、「紀事」凡節分は立春の前日にあり、
年内節分あるときは、禁裡蒸豆を殿中に撒かせられて疫鬼を逐ふ、春にあるも亦然り
今夜大豆を撒くを拍はたすといふ、同夜家々の門に鰯の頭首並に狗骨ひらきの條ただを挿む、傳へいふ
此二物疫鬼の畏るゝ所なり、一家の内に事を執る者を年男といふ、高聲に鬼は外福は
内と呼て、疫を禳ひ福をもとむ、云々である。世俗今夜を年越と稱へ、撒きたる豆を
己が年の數より一つ多く食べる風習がある。

むかし浅草の観音堂では、當夜節分會を執行し、豆の代りに大般若の守札を撒いたの
で、井を拾はんと參詣するもの、境内に群集したさうである。

観音の鬼は般若の札を撒き
節分を補陀落山へもみあげ
節分の札を優婆塞うばいどり

節分の鬼切丸は赤鰯
節分につかふ鰯は生きて見え

〔解〕城門には終の代りに橋を挿す、

お妾をよく見て歸る柊さし
太神樂まはせるそばへ柊さす
一町へ鰯柊後や先
またぐらへ柊の生える角大師
豆蒸りを大家の内儀つかみぞめ
豆を蒸る豆売をさす忙しさ
豆を蒸るに豆売を焚く忙しさ
盗人猫を豆売でくらはせる
年越に十二の禿なぶられる

厄拂ひは、節分の夜にも晦日の夜にも来る乞食の一種である『塵埃談』に、厄拂ひとい
ふ非人、節分の夜は御厄拂ひが厄拂ひまじよとさげび、武家町家を歩行く事は今昔か

はりなし、文化元子年頃より大晦日、正月六日、同十四日夜にも除夜の如くに、御厄はらひくといふて来るなり、しかし節分の如くに大勢は来らず、とある。現今は御厄拂ひましよ厄落し、など叫んで来る、其文句は無論種々あるが、「今晚今宵の御祝儀に目出たきことにて拂ひましよ」と魚盡し役者の名盡し等で目出度き文句を列べるのである、嘉永頃は、

あゝら、めでたいなく、だんな、住吉御参詣そり橋から西を眺むれば、七福神の船遊び、中にも夷といふ人は、命長柄の竿をもち、めぎすおぎすの絲をつけ、金と銀との針をたれ、釣たる鯛が姫小鯛、かほごめでたき折からに、いかなる悪魔が来るとも此厄拂ひがひとつらへ西の海とは思へども、ちくらが沖へさらり。などいふのが厄拂の文句であつた。

たつた一文でやあら旦那なり
豆打はやあら旦那もひく、いひ
算盤を一文投げて置き直し
御子孫も繁昌おつとよし

西海へ鬼神をほうる忙しさ
外道めを埋草にする西の海
龍宮の聲をも入れる厄拂
佃へも二人位は厄拂
二三人海をも渡る厄拂
厄拂出しなに一つやつて見る
厄拂お菜の内て手間が取れ
厄拂いつち仕舞に掛り人
○晦日 神田明神年越のはらひ○諸社年越参。
年の市 大通り夜中也、市商人は元朝おのが家に歸る。
もふ撞くはくと通る市歸り

川柳江戸砂子終

○月並參詣の場所

○三日、十八日 上野兩大師 ○八月十八日 雜司谷鬼子母神

○八日、十二日 藥師○かやは町○淺草東光院○高田南藏院 其外

○十五日 八幡ふか川、三田、千太かや、淺谷、市谷、つくさ、高田 ○十五日 神田明神、芝神明

○十八日 淺草觀音 ○廿四日 芝愛宕

○廿五日 天神。湯島、龜戸、小日向、平川、大窪、其外所々

○卯ノ日 龜戸妙義 ○己巳 辨天しのぼす 本所一ツ目

○山門の開日 東叡山 上ニ文珠弁
増上寺 上ニ十六羅漢
淺草寺 上ニ文珠弁

正、七月十六日 ○二、八月彼岸の入、中、明 ○二月十五日 ○四月八日

跋

世、山水の美を好む者多く、未だ人事の美を解する者至つて尠し
山水の美や元より美なりと雖、而も一目にして盡き、千古を経るも
移らず。人事の美は然らず、複雑にして變轉極りなく、能く一朝一
夕にして探り得べきものにあらず。

予は美濃國大垣在の一農夫、其久しき習慣上より敢て山水の美
に飽きし者にはあらざるも、好んで人事の美を愛す、これ自然の數
のみ、而して予の川柳を好み、川柳雜誌『青柳』を發行し、繼いで
『柳檉拾』月刊する、その理また一なり。

夫れ川柳は、寶曆の昔、江戸に興りし我國獨特の人事詩、風俗詩

なり。隨て其吟詠する處、悉く江戸を中心とせざる莫し。

吉田松陰嘗て人に教て曰く、「地を離るれば人なし、人を離るれば事なし、故に事を成さんとする者は、應に地理を究むべし」と。地を離れて人なし、人を離れて事なし、川柳の研究者、また須らく江戸の地理を究めざるべからず。されど川柳の學、未だ初步にして、これ等の指導書拂底を告げ、研究の進歩爲に遅々たり。

此時に當つて畏友卯木氏、川柳學開展の道場たる江戸の地理を究めて本書を著す。予、欣喜措く能はず、即ちこれを請ひ、速刻鉛版に附し、以て永く斯界の寶典たらしめんとするもの也。

辛亥中秋

田中蛙骨

馬馬魯魚

頁	行	誤	正
八	七	原橋	京橋
九	九	桃吹く頃に	桃咲く頃に
四	四	持つて來す	添つて來す
二〇	二〇	かゞのこゝ	こは衍
三	三	踊り手	踊り子
一	一	呼せて見せり	寄せて見せり
二	二	屋根船	屋形船
七	七	區區本履	區區木履
八	八	雪踏屋と下駄屋軒を並る <small>(七字)</small>	雪踏屋と下駄屋軒を並る <small>(七字)</small>
八	八	入船の時、此勘三郎に金の <small>(三字)</small>	入船の時、此勘三郎に金の <small>(三字)</small>
七	七	律義まつぼう	律義まつぼう
二	二	見當られ	見立られ

頁	行	誤	正
一〇	八	まげゆき	まげゆき
八	九	ありつけたけ	けは衍
二〇	二〇	いざこぎ	いざこざ
一	一	前表は念佛を聞く <small>(二字)</small>	前表は念佛を聞く <small>(二字)</small>
三	三	いざ立出でんとすれば <small>(一字)</small>	いざ立出でんとすれば <small>(一字)</small>
三	三	實あきもの有	實なきもの有
四	四	承平二年將門叡山に登り <small>(位置)</small>	承平二年將門叡山に登り <small>(位置)</small>
七	七	一步おこれば	一步おこれば
一	一	唱へるのこ	のは衍
六	六	さ雛納め	させ納め
二〇	二〇	布子を入れて	布子を受けて
二	二	せわしなき	せわしなさ

大垣で印刷したのを大阪で校正するといふ不便の爲め、時日が許さなかつたので、再校することが出来ず、印刷後如上の誤りを発見した、尙右の外認められる箇所があれば讀者からも御注意を願つて「背柳」誌上で是正する事にす。
(編者)

(川柳江戸砂子奥附)

明治四十四年十二月卅日印刷
明治四十五年一月五日發行

岐阜縣安八郡大藏町大字御藏七十七番戶

編纂兼

發行者

田中守躬

岐阜縣安八郡大垣町字郭四拾五番地ノ貳

印刷者 河田貞次郎

岐阜縣岐阜市七軒町貳百五拾四番地

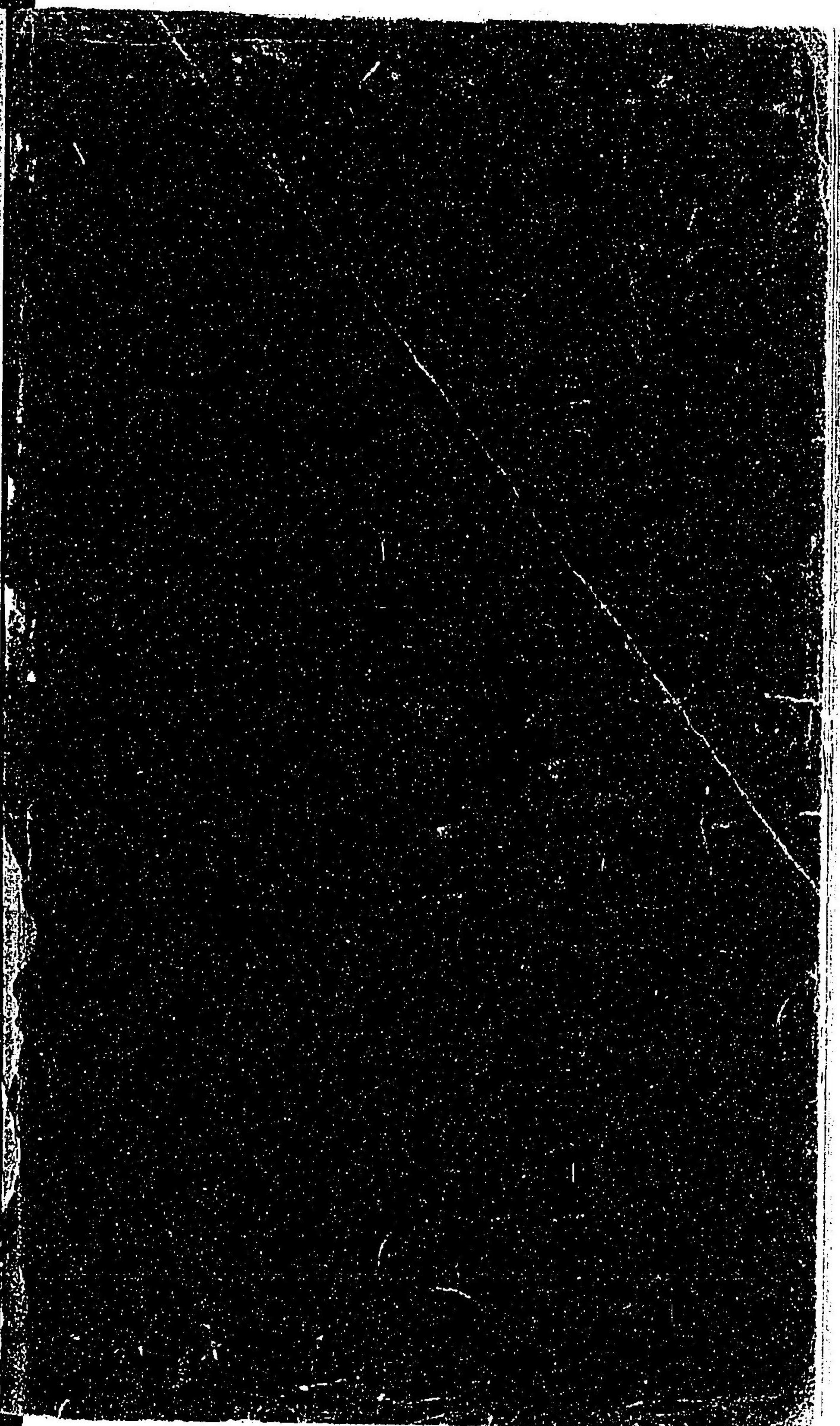
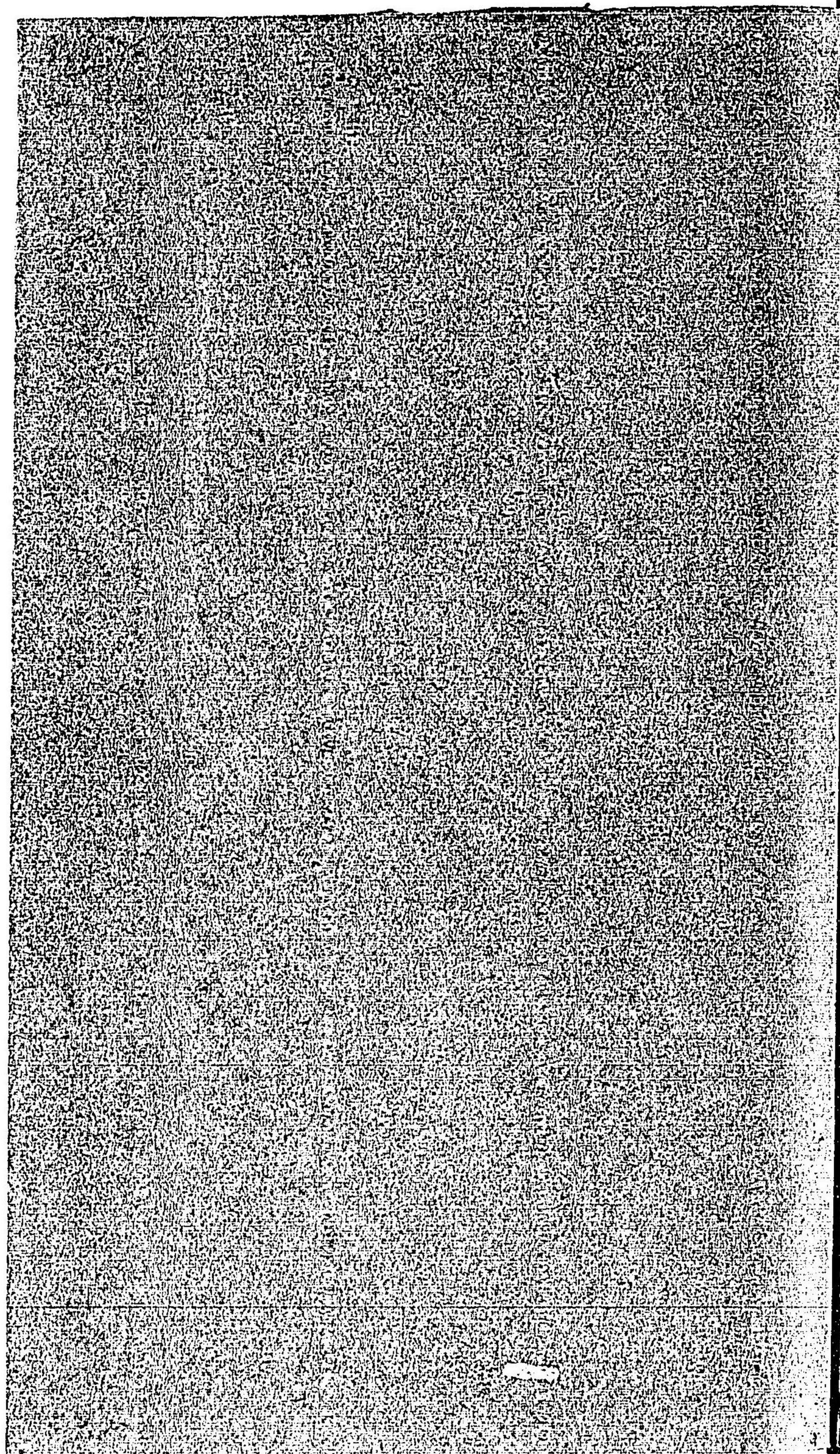
發行所

西濃印刷會社

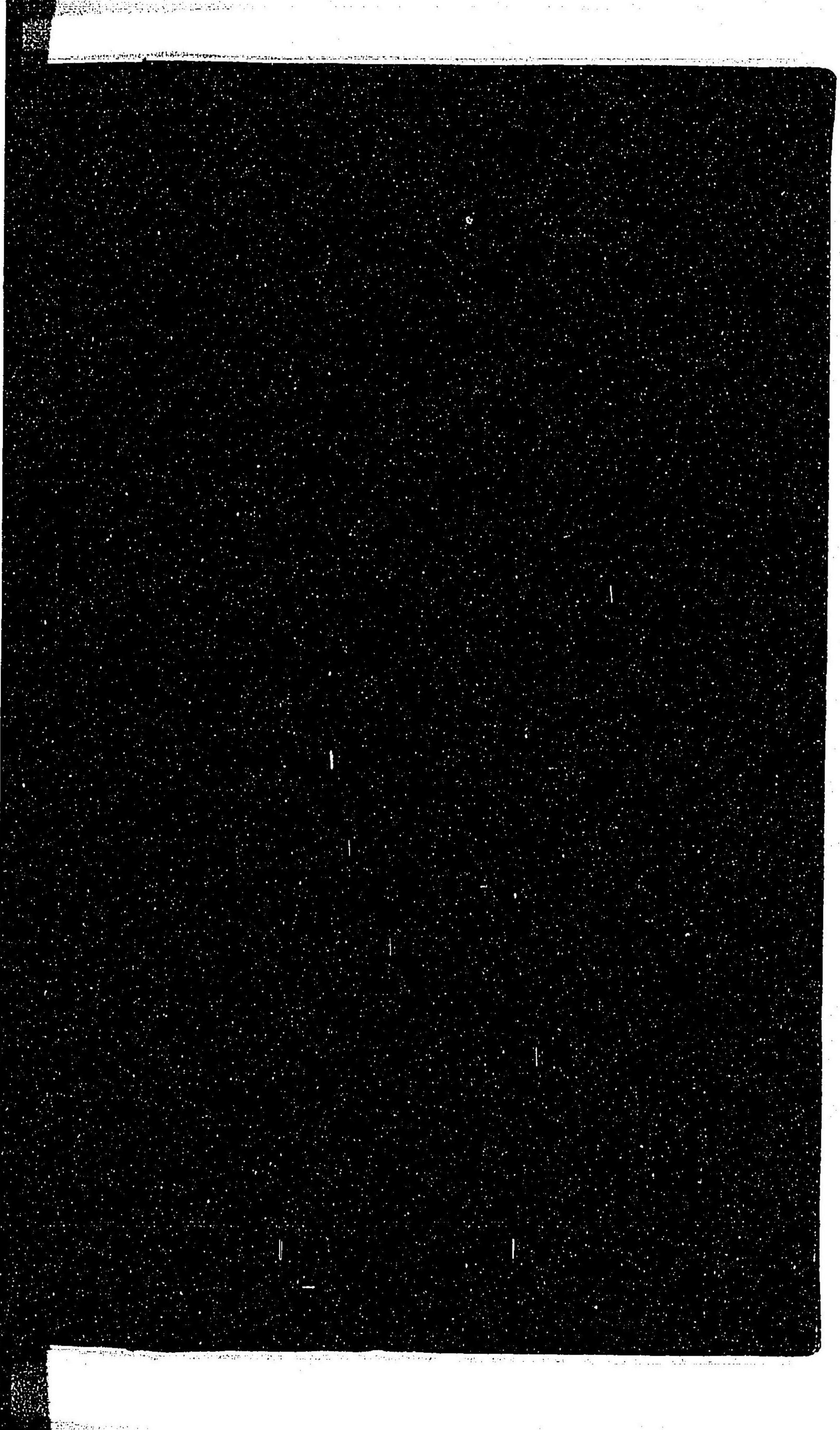
岐阜出版部

(定價金貳圓)

西濃印刷株式會社印刷



332
220



087837-000-6

332-220

川柳江戸砂子

今井 卯木/編

M45

DBF-0180



